

高原の風だより

2016（平成28）年3月 発行 <第4号>

木曾町合併10周年

平成17年11月に木曾町が誕生して早10年。昨年はこれらを祝して様々な記念イベントが行われた。また、日本で最も美しい村連合の記念大会や御嶽山噴火に伴う慰霊祭等々、町にとっては非常に忙しい1年になり役場職員をはじめ関係者は本当に大変だったろうと推察される。

合併10年が経過し、町の人口は大きく減少。これから新たな10年、20年と歴史を刻み、より魅力的な地域にしていくためには、どうすればいいのか。合併時に目指した考え方や思い、取り組みなどに対して現実はどうなっているのかこの10年間の歩みをきちんと検証するとともに、将来を見据えた取り組みを着実に実施していくことが重要だと思う。

三岳地域の人口が大きく減少

少子高齢化に伴い全国的に人口減少が大きな問題になっている。とりわけ木曾地域のような中山間地域にとっては、地域の存亡にも関わるような本当に大きな問題だ。

4町村が合併して木曾町が誕生した平成17年11月、町の人口は13,985人だった。それから10年後の昨年11月には11,972人になり2,013人の減少（▲14.4%）で毎年200人ずつ減ってきた勘定になる。

それではこの人口の推移を地域別（旧町村ごと）に見たらどうだろうか。予想通り地域によってその減少率に差が生じていることが明確である。中でも大きく人口減少が生じたのが三岳地域である。合併時に1,794人だった人口が10年で400人以上も減って昨年11月時点では1,383人（▲22.9%）という状況である。そのほかの地域は木曾福島が▲1,108人（▲14.7%）、開田高原が▲270人（▲13.5%）、そして一番減少率の低かったのが日義地域で▲224人（▲8.4%）という状況である。（右上「地域別人口の推移」及び左下「地域別人口指数」参照）

地域を維持できなくなることが問題

人口減少は、人口が減ったことが問題なのではなく、減ったことによって様々なひずみが生じて地域を維持できなくなることが大きな問題なのだ。人口が減ったことにより児童や生徒数が減って学校を維持できなくなったり、若者が少なくなって消防組織が成り立たなくなったり、後継者がいなくなって地域のお祭りなど伝統行事を行うことができなくなってしまい地域の魅力そのものが失われてしまうといったようなことが大きな問題なのである。

それでは人口を増やすためにはどうすればいいのか。各自自治体はその解決に向けて子育て支援や若者定住、就労の場の確保など様々な施策を講じているが、地域や自治体によっても事情は様々で、これをやれば解決するという簡単なものではない。いろいろな取り組みを複合的に実施していくことが必要だと思う。

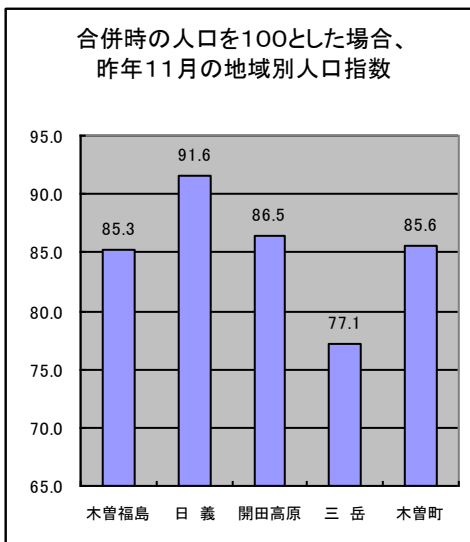
人口を増やすためには1ターンなど外から人を呼び込むか、地元で出生数を増やすかどちらかである。次頁では昨秋、開田高原で行った1ターン者フォーラムの内容を紹介する。

木曾町の地域別人口の推移（人、%）

地域名	H17.11	H27.11	増減	増減率
木曾福島	7,541	6,433	▲ 1,108	▲ 14.7
日 義	2,657	2,433	▲ 224	▲ 8.4
開田高原	1,993	1,723	▲ 270	▲ 13.5
三 岳	1,794	1,383	▲ 411	▲ 22.9
合 計	13,985	11,972	▲ 2,013	▲ 14.4

資料：木曾町役場

合併時の人口を100とした場合、昨年11月の地域別人口指数



人を引きつける地域の魅力とは

～開田高原で1ターン者フォーラム～

今から10年ほど前、4町村が合併し木曾町が誕生した2005（平成17）年の10月、開田村の人口は約2000人で、この中に1ターン者が118世帯、268人、率にして13.5%を占めていた。他町村の状況は分からないが、この率は相当高いのではないかと考えられる。

転入者は、なぜ開田高原を選択したのか。そのきっかけや動機は何だったのか。移住を決断するに当たって一番苦労されたことは何だったのか。それらの課題をどうやって克服したのか。仕事や地域との関わりなどはどうだったのか。現在の仕事や生活面で問題はないのか等々、1ターン者の皆さんから直接話を伺ってこれから受け入れるためのヒントを得たい、そのように考えて昨年11月28日、東京経済大学の羽貝正美先生を講師にお招きし1ターン者フォーラムを開催した。

喜んでいるか、愛着があるか、プライドがあるか

フォーラムでは最初に東京経済大学の羽貝正美先生が「人を引きつける地域の魅力はどこから生まれるか、その魅力をいかに発信するか」～人口減少時代の地域づくりに求められること～と題して講演した。（写真左）



「少子高齢化という抗い難いメガトレンドが日本全体を覆う中、一部の大都市を除き多くの基礎自治体（市町村）・地域が人口減少とその克服という課題に直面している。各自治体は、そうした現状を克服するために、互いに競い合うように若者の定住促進や1ターン者・Uターン者の増加に向けてさまざまな取り組みを始めている」とした上で、「今回のフォーラムでは、人口増加のための特効薬を考えるというのではなく、少し遠回りになるが、自然に人が集まり、とどまりたいと思うような、同時に外部からも何度も訪れたいと思うような町や村、地域とするためにはどのような取り組みが必要か、この点に焦点を合わせて考えたい」と話を進めた。

その中で、移住者の智恵や考えなども参考にしながらいろいろな人たちが自分たちの地域に関心を持って小さなことでも自ら関わっていきこうという気持ちが大事だと力説。そして「住んでいる人が喜んでいるか、土地に愛着があるか、プライドを持っているか」そこが重要だとし、それを実現するために魅力ある地域づくりや美しい風景の保全活動、住民自治への参加と実践等々自主的、主体的な取り組みの重要性を訴えた。



1ターン者9名が思いを発表

（写真右）

羽貝先生の講演に引き続き出身地も転入時期も年齢も職業もまちまちの1ターン者の皆さん9名が体験談などを発表した。それぞれが自然豊かな開田高原に魅力を感じて移住し生活を営んでいる。

■**冷涼な気候生かし無農薬有機栽培** 渡部光徳さん（71歳・埼玉）農業「テイク・オン・ファーム」
有機栽培を手がける「テイク・オン・ファーム」の渡部さんは16年前に移住。「自然の循環」を考えながら、この地に適した健康でおいしい作物を作っている。トマトやジャガイモ、カブ、ソバ、トウモロコシなど殺虫と消毒のための農薬、除草剤、化学肥料はいっさい使わない無農薬有機栽培を実践。開田高原の冷涼な気候を生かして育てた旬の無農薬有機野菜を新鮮なまま産地直送で全国の会員へ届けている。

■**一番の魅力は住んでいる「人」** 渡邊 実さん（48歳・愛知）パン屋「和和パン」
渡邊さん夫妻は、元教員。子どもの教育と仕事を辞めてくる決断が一番大変だった。こちらで同じ生活をしようとは思わないが、一定の安定した収入は必要。開田高原の魅力は「四季の変化など自然の素晴らしさはもちろんだが、住んでいる人が一番好き」。起業という高いハードルを越えなくても、住まいや仕事を何とか見つけられるような、そんな仕組みや体制づくりが移住者を増やしていくポイントではないか。

■**こんなに自然豊かで素晴らしい所はない** 山岸保昭さん（49歳・下諏訪町）コテージ経営
大手アパレル会社で働きヨーロッパにも何度となく足を運んだ山岸さん。ヨーロッパのあの美しい景色が忘れられず開田高原に土地を購入、コテージ経営をしている。「こんなに自然が豊かで素晴らしいとこ

ろはない」と話す山岸さん。観光客が移住し、起業してくれる人が増えてくれればと考えている。そのためには土地の情報提供や減税など受入態勢の整備が欠かせない、と指摘する。

■趣味の溪流釣りがきっかけ 安藤英治さん(67歳・岐阜) 喫茶店「開田のポップ屋」

趣味の溪流釣りがきっかけで開田高原へ移住した安藤さん。開田高原に住むに当たって3つの条件があった。①御嶽山が見える。②バス停に近い。③住民と一緒に住める。不動産屋に紹介してもらったこの3条件を満たしたのが今の場所。鉄道マニアだけあって外にはミニチュア列車が走り、小さなお子さん連れのファミリーに大人気。いつもお客さんに開田高原の自然や景観の素晴らしさを自慢している。

■PTA活動通じて地域にとけ込む 寺本勝司さん(53歳・愛知) ペンション「ロジック上天気」

寺本さんは奥さんと子どもと3人で開田高原へ移住し、ペンションを経営。開田へ来てから22年、この間に子どもが一人増え2人になった。苦労した点は、どうやって地域へ入っていくか。地域のさまざまなルールやしきたり、慣習などがある中で地域へなじむこと。それでも子どもの関係でPTAの役員をやるようになってから多くの知り合いや友達ができ、そういう中で自然に地域へなじんでいくことができた。

■開田高原で初の印刷屋 田川政広さん(72歳・愛知) かいだ印刷

田川さんは、移住してかれこれ40年余。開田高原で始めた仕事は印刷屋(「かいだ印刷」)。資本金ゼロから始めた仕事で最初は手書きのガリ版印刷。3年目にタイプライターを購入し4年目には印刷機を入れた。そして10年過ぎにようやく現在の印刷所の形が整い今に至っている。何事にも熱心な田川さん、商工会役員をはじめ消防班長、社会教育では開田公民館長など数多くの要職もこなしてきた。

■シイタケで農林水産大臣賞 池上達雄さん(64歳・京都) シイタケ栽培

移住して早40年。友人が開田へ山小屋を造りその作業を手伝ったことがきっかけ。アルバイトで稼いだお金をつぎ込んで原木を購入しシイタケ作りを始め、千本、二千本と徐々に規模拡大。工場生産の菌床栽培が主流の現在、農薬を使わない自然栽培の原木シイタケにこだわっている。昨年は石川県で開催された全農乾椎茸品評会の「花どんこの部」において、池上さんのシイタケが農林水産大臣賞を受賞した。

■忘れられない御嶽の勇姿 田中芳江さん(71歳・奈良) ギャラリー「あずき亭」

築160年の古民家で同じ移住者の一人で木工の仕事をしているご主人と2人暮らし。子どもは2人で長男は東京でサラリーマン、長女は近くに嫁ぎお孫さんもいる。登山で初めて開田高原を訪れたのは50年ほど前。御嶽山を眺め「裾野がグリーンの絨毯を敷き詰めたようで本当に感動した」。今は家の一部をギャラリーとして解放し、編み物や山野草・ハーブの花籠、リース、ハーブティーなどを作っている。

■家でも馬を飼う自称「馬バカ」 中川 剛さん(38歳・愛知) 木曾馬乗馬センター

18年前の20歳の時、開田村振興公社職員として就職。木曾馬乗馬センターで馬の生産をはじめ調教、観光乗馬などの仕事を5名程の職員と一緒にこなす。家でも自分の馬を飼うほどの自称「馬バカ」。結婚式も馬に乗って歩き沿道の祝福を受けた。「地元の人にもっと馬との関わりを持ってほしい。そして地域を見つめて直してほしい」という中川さん。子どもは3人になり家族は5人とにぎやかになった。

暮らしやすく、外からも来たいと思う地域

フォーラムでは1ターン者の発表の後、講師の先生や発表者などを交えて交流会を開催。ぼたん鍋を囲み地酒を飲みながら意見交換を行った。(写真右) 今回のフォーラムで改めて御嶽山を中心とする地元の自然の豊かさや景観の美しさ、環境の素晴らしさなど普段が気づかない見慣れた平凡なものであっても潜在的な価値や大きな魅力を持っているということを再認識することができた。

羽貝先生が紹介してくれた柳田国男の「村を美しくする計画などというものはないのであって、良い村が自然に美しくなっていくのではないか」という言葉は、参加者からも多くの共鳴する声があった。確かに理屈抜きで分かるような気がする。



結局のところ1ターン者を呼び込む地域の魅力とは、先生が指摘されているように「安全・安心で暮らしやすく、外からも人が来たいと思うような地域づくり」に尽きるのではないかと思う。そのためには今、そこに暮らしている自分たちがどういう生き方をしているのかも重要になる。今回のフォーラムでは羽貝先生や1ターン者の皆さんから貴重な示唆や提言をいただくことができた。これを契機として地域の魅力づくりに向けてさらにみんなで力を合わせ一歩一歩地道に着実に自分たちができる範囲で活動が続けていきたいと考えている。

(*)フォーラムの詳細は長野県地方自治研究センター発行の『信州自治研』(2、3月号)に掲載。

はりきりご長寿列伝

藤原 節子さん (82歳・大桑村) ④

NHKテレビのイブニング信州の中で放送している「はりきりご長寿列伝」で昨年11月25日、大桑村の藤原節子さん(82歳)を紹介させていただきました。

花は生き甲斐、自分を励ましてくれる ~押し花で絵を描く~

大桑村の藤原節子さんは、押し花や押し葉などを使って絵を描くのが趣味です。自宅の周りや裏山など身近な所にある植物や木の葉などを「絵の具」として使いいろいろな絵を描きます。



自宅で絵づくりに励む藤原さん

さまざまな色や模様の押し葉など四季の草花を使っての絵づくりについて「やればやるほど面白く、深みが増していく」という藤原さん。「自分が寂しいときも押し花が救ってくれる」とも。

押し花との出会いは今から20年ほど前、郵便局で行った押し花体験会がきっかけです。その後、月1回の押し花教室が開かれるようになり、そこで仲間と一緒に作り続けてきました。始めて間もない平成8年には、押し花はがきコンクールで入賞を果たすなどめきめき腕が上達。5年ほど前には押し花で「木曾八景」を描き、村の文化祭で展示しました。

また、「木曾八景」を題材にミニ便箋を作り、知人らにプレゼントして大変喜ばれました。

「花は生き甲斐で、自分を励ましてくれる。これからも教室がある限り続けたい」と笑顔で話してくれました。



藤原節子さん



白樺などで描いた「寝覚の床」

ちよっといい言葉

身の回りには心に響くいい言葉がたくさんあります。

私のお気に入りの言葉を少し紹介します。

- 体は硬くても、心は柔軟に。
- 晴れの日には枝が育ち、雨の日には根が育つ。
- 失敗はそれを活かすことにより、経験となる。
- 待たせる時間は短く感じて、待つ時間は長く感じる。
- 「あの頃はつらかった」と言えるのは、今が幸せだから。
- 「辛」いことも「一」つ何かを足すと「幸」せになる。
- やってしまった後悔は月日が経つことで薄らいでいくが、やらなかったことへの後悔は月日が経つことで増幅する。
- いつでも行けるは、いつまでも行かない。いつでもできるは、いつまでもやらない。だからこそ、今すぐ行こう。いますぐやろう。



(窪文雄の人生を好転させる100の『いいことば』より)

すんき料理を味わう会

先月下旬、福島会館で「地酒とすんき料理を味わう会」を開催した。主催した開田高原倶楽部の会員のほかに付近の住民など20人余りが集まった。会場にはすんきを使ったおやきやピザ、パスタ、春巻き、チャーハン、卵焼き、パン、ヨーグルトなどが用意され、参加者はすんきとの相性を確かめながらそれぞれの料理を地酒と一緒に味わった。最後はお待ちかねのとうじそばが出され、「やっぱりすんきそばが最高!」という声も聞かれた。健康食ブームの中で近年、無塩の漬物として脚光を浴びているすんき。様々な食べ方を工夫しPRすることで、さらにすんきの愛好者が増え、その需要が伸びることを期待している。



編集・発行者： 大目 富美雄 (おおめ ふみお)

〒397-0301 長野県木曾郡木曾町開田高原末川 5190 番地

電話& FAX 0264-42-3661

携帯 090-2526-7156

E-mail info@ome-fumio.com